が走ってくる状況をスクリーンに投影し、高齢者に合図と同時に 8 秒間足踏みしてもらうというもの。スクリーンの画面奥にいるクルマはどのくらい離れているかなどを高齢者に答えてもらう。このクルマは 120m 離れていて、横断を開始した時点（足踏みを始めた時）から 60km/h で向かってくるという設定。75 歳以上の高齢者の平均歩行速度は約 1m/ 秒なので、幅が 8m の道路の横断には約 8 秒かかる。一方、60km/h で走るクルマが 120m 進むのにかかる時間は約 7 秒なので、道路の後半付近でぶつかってしまう。これによって、向かってくるクルマの距離や速度はわかりにくいため、クルマが遠くに見えても大丈夫だろうと無理に渡らないで待つほうが安全だと理解してもらうことができる。

このほか、DVD には「視野編」「夜間編」も収録されており、それぞれ単独で活用することができる。

「視野編」では現状で自分がどのくらいの範囲が見えているのか、両手を使って確かめる。そして、視野は加齢とともに狭くなっていることを高齢者に気づいてもらう。

「夜間編」ではクルマのヘッドライトのロービームとハイビームの照射範囲の違いや反射材の効果、ドライブレコーダーの映像で夜間、横断する歩行者はドライバーからどのように見えているかを理解してもらうことができる。

最後に、高齢者に守ってほしい要点を再確認してプログラムは終了となる。

進行役の「テルちゃん」の指示に合わせて自分の視野を確認

ヘッドライトのハイビームとロービームの照射範囲を比較

昼間に比べ、夜間は歩行者が見えにくいことを知ってもらう

反射材を着用することで、ドライバーからの視認性が高まることを伝える

Safety Report　セーフティルポ　子ども

「将来、社会で活躍する君たちへ」のプログラムを活用して交通少年団の団員が自転車のルール・マナーを再確認

交通少年団は野外訓練や交通安全活動等を通じて子どもたちが交通ルールやマナーを身につけ、やさしさと思いやりの心を持った社会人として育つことを目的として、東京都内98地区の交通安全協会で結成され、活動を行っている。

その一つ東大和地区交通安全協会の交通少年団が 2 月 23 日、団員 24 名（小学 3 ～ 6 年生とリーダー役の中学生）を対象に交通安全教室を実施。この中に、Honda が開発した小学校高学年・中学生向けプログラム「将来、社会で活躍する君たちへ」が取り入れられた。このプログラムは「歩き」「自転車」「標識」の 3 つのテーマで構成される映像教材で、社会生活を豊かに送る上での基本である「ルール・マナーを守り、習慣化させる」ことで、次代を担う子どもたちが交通安全を自分事ととらえ、事故に遭わないようにすることを目的としている。小学校高学年や中学生が歩行中、自転車乗用中にやってしまいがちなルール・マナー違反の映像を見せた後、指導者が児童・生徒に問いかけ、色々な意見を引き出しながら進められるようコーチングの手法を取り入れている。

交通安全教室で指導を担当するのは、交通少年団副団長馬上（もうえ）礼子さん。「10 日ほど前に開催された東京都交通安全協会主催の東京交通少年団指導者研修会で、このプログラムの紹介がありました。ちょうど春休みを控えた時期で、子どもだけで外出する機会も増えます。そうした子どもたちへの教育に最適だと考え、使ってみることにしました」と話す。

まず導入として、スクリーンに Super Cub の画像（写真参照）を映し出す。約 30 秒間で一部が徐々に変化していくので、変化した箇所を子どもたちに見つけてもらうというもの。これから始まる交通安全教室への関心や集中力を高める役割を果たす。

そして本編に進む。今回は自転車をテーマにした映像を使用。中学生が家から目的地の体育館まで友人と自転車で向かうというストーリーで、交通ルールを守っていなかったり、危険な乗り方をしている場面が出てくる。映像が終わり、どのようなルール・マナー違反があったか馬上さんが尋ねると、団員は「家から車道に出る時、左右を確認していなかった」「『止まれ』の標識があるところで止まっていなかった」「自転車が 2 列で走っていた」「点字ブロックの上に自転車を停めていた」と答えた。

それを確認するため再度、映像を流す。前回の映像ではルール・マナー違反をした中学生は事故に遭わないが、今回はクルマや歩行者と衝突してしまう。

「皆さんは、こんな乗り方をしていませんか？ 春休みもあるので、これから自転車で出かけることが多くなると思います。今、皆さんが答えてくれたルール・マナー違反をしないように気をつけましょう」と馬上さん。解説編に収録されている自転車利用者の目線で撮影した映像を使って、一時停止標識がある場所や見通しが悪い場所を通る時は必ず止まって左右の安全確認をしなければならないと強調した。最後に、問題編の場面を中学生たちがルール・マナーを守って自転車に乗っている映像で安全な走行について確認し、終了となった。

馬上さんは「Honda のプログラムは映像をただ流すだけでなく、途中で質疑応答ができる点が良かったと思います。映像を見て感じたことを伝えようとする子どもたちの姿が印象的でした。私たちは団員に 1 年を通じて交通安全指導をしていますが、その総仕上げとして最適なプログラムだと感じました」と今後も活用していきたい考えだ。

交通安全教室に参加した団員からは「いつも自転車で走って慣れている道でも危険であることがわかったので、気をつけたいと思いました」「これから『止まれ』の標識があるところでは、止まって左右の確認をしようと思います」という声が聞かれた。

導入で使われた Super Cub の画像

問題編の映像の中でルール・マナー違反をしている場面を見つける

どのようなルール・マナー違反があったのか団員に尋ねる副団長の馬上さん

安全な走行について映像で確認する